

## ★P2-7 子宮頸部細胞診における意義不明異型扁平上皮細胞 (ASCUS: ベセスダシステム) の臨床的意義

癌研有明病院

川又靖貴, 平井康夫, 竹島信宏, 宇津木久仁子, 藤原 潔, 杉山裕子, 馬屋原健司, 田中都生, 滝澤 憲

【目的】ベセスダシステムにより意義不明異型扁平上皮細胞 (ASCUS) と判定されたものの中には子宮頸部病変の存在するものとしもないものと予測される。我々は、子宮頸部細胞診で ASCUS と判定された症例に対して頻回のフォローアップ、組織診、ハイリスク型 HPV-DNA 検査を施行し、ASCUS の臨床的意義について検討した。【方法】2003 年 9 月から 2004 年 12 月に当科で子宮頸部細胞診を施行した 39,001 例を検討対象とし、この期間中に ASCUS と判定された 89 症例を再鏡検した。この期間に同意を得られた 24 名に対してハイリスク型 HPV-DNA 検査を施行した。そのうち 3 ヶ月以内に組織診を施行した ASCUS の 16 例について、HPV-DNA 検査の結果と中等度異形成以上の子宮頸部病変の有無について検討した。ハイリスク型 HPV 検査はハイブリットキャプチャー法または、高度先進医療の PCR 法を用いた。【成績】ASCUS 症例中、38% に最終的に中等度異形成以上の高度病変が認められた。今回の ASCUS 症例では、パパニコロウ染色の細胞像からハイリスク型 HPV の陰性と陽性を予測することは不可能であった。一方ハイリスク型 HPV-DNA 検査の併用により、中等度異形成以上の高度病変を効率的に検出することが可能であった。【結論】ベセスダシステムは、"BETHESDA SYSTEM 2001 ワークショップ" の勧告にそって改訂され、従来の ASCUS は、ASC-US と高度病変を除外出来ない ASC-H に 2 分された。今回の症例中、38% に最終的に中等度異形成以上の高度病変が認められたことから、新ベセスダ分類ではこれらは大部分が ASC-H に分類すべきものであることが判明した。従って新ベセスダ分類を用いることにより、細胞診の感度向上が期待できることが示唆された。

## ★P2-8 30 歳未満の子宮頸癌検診一特に隔年検診について一

弘前大<sup>1</sup>, むつ総合病院<sup>2</sup>, 国立病院機構弘前病院<sup>3</sup>二神真行<sup>1</sup>, 横山良仁<sup>1</sup>, 樋口 毅<sup>1</sup>, 水沼英樹<sup>1</sup>, 佐藤重美<sup>2</sup>, 工藤香里<sup>3</sup>

【目的】平成 17 年 4 月から健診対象年齢を 20 歳以上にひきさげること、健診間隔は 2 年に 1 度でも良いとすることとされた。今回我々は県内における 30 歳未満の細胞診異常の年次推移について検討した。【方法】平成元年 1 月から平成 16 年 3 月まで、県内の各医療機関から総合健診施設に依頼され、細胞診断を行った 684,623 件を対象とした。このうち 30 歳未満の若年婦人から採取された 129,918 件について検討した。【成績】30 歳未満及び 20 歳未満の若年婦人は、総検体数のそれぞれ 129,918 件 (19.0%), 9,451 件 (1.4%) を占めていた。この割合は 15 年間で大きな変化はなかった。30 歳未満の異常細胞診の割合は、平成元年で 2.8% だったが、平成 16 年は 9.9% と上昇した。妊娠の有無で分けると、妊婦での細胞診異常の割合は 1~5% と極端な増加はなかったが、非妊婦では当初 2% 前後だった細胞診異常の割合が、平成 15 年には 10.9% まで増加した。また 20 歳未満の細胞診異常の割合は、平成元年で 3.7% だったが、平成 16 年は 8.7% まで増加した。16 年間の治療例は 262 例で上皮内癌 213 例、微小浸潤がん 18 例、1b 期以上の子宮頸癌 21 例、AIS1 例、頸部腺癌 5 例、その他の癌 4 例だった。治療例の細胞診は、初回から 3b 以上が 191 例、経過観察中に 3b 以上が 45 例、3a 以下のものが 26 例であった。【結論】30 歳未満の細胞診異常が高率であり、検診年齢の引き下げは妥当である。しかし検診間隔が 2 年であると、27.1% の治療が必要な症例が、発見時に更に進行していた危惧を否定できない。隔年検診は再検証する必要がある。

## ★P2-9 HPV 感染と子宮頸部異常の population-based study

金沢大保健学科<sup>1</sup>, 石川県立中央病院<sup>2</sup>, 金沢大<sup>3</sup>笹川寿之<sup>1</sup>, 山田里佳<sup>2</sup>, 井上正樹<sup>3</sup>

【目的】最近、子宮頸癌の若年化傾向がみられ、HPV-DNA 検査の癌検診への応用や HPV ワクチンによる感染予防が注目されている。一般女性の HPV 感染状況、感染パターン、感染型を明らかにし、検診やワクチンの開発に役立てる。【方法】子宮頸癌検診を受けた 14-91 歳までの女性 8264 名について、文書による同意を得たのちに、子宮頸部細胞診、Hybrid capture-2 法による HPV 検査、DNA microarray 法による HPV 型判定を行った。【成績】全体の HPV 感染率は 11%、高リスク型 9.6% であった。14-19 歳では、それぞれ 45%、42%、20-24 歳では 28%、25% が感染しており、若いほど感染率が高く、約半数が混合型感染であった。細胞診クラス 5 は 18 例 (0.24%)、クラス 3b、4 は 72 例 (0.84%)、クラス 3a は 503 例 (6.1%) で、HPV 陽性率はそれぞれ 100%、86%、62% であった。HPV 陽性で細胞診正常は、若い女性では高率であったが、30 歳以上では 6.8% 以下であった。逆に細胞診異常で HPV 陰性の症例は年齢が進むほど低下し 55-59 歳では 33% であった。各 HPV 型の頻度は、52 型 (21%)、16 型 (20%)、58 型 (15%)、51 型 (12%)、56 型 (11%)、18 型 (8.4%) の順であり、HPV16 近縁型は 66%、HPV18 近縁型は 27%、HPV56 近縁型 18%、HPV51 近縁型 13% にみられた。クラス 3b 以上の異常を誘発する HPV 型の Odd 比は、35 型 (OR=172)、16 型 (OR=25)、33 型 (OR=22)、58 型 (OR=19)、52 型 (OR=15)、59 型 (OR=14)、18 型 (OR=14)、69 型 (OR=12)、混合型 (OR=12) の順であった。【結論】若い女性では混合型 HPV 感染が多い。30 歳以上の子宮頸痛スクリーニングに HPV 検査はきわめて有用である。癌検診や HPV ワクチン開発において、HPV16 近縁型の HPV33, 35, 52, 58 型は HPV18 型よりも重要である。